

若手作家の魅力伝える

子育てを終えて還暦を過ぎた女性が芸術に関わりたい一心で立ち上げたアートギャラリー「ギャラリーワッツ」(東京都港区)は、約20年にわたって若手作家らの発信拠点を担ってきた。オーナーの川崎淳与さんは7月に82歳で死去し、スタッフで長女の山本詩野さん(52)が母の思いを引き継ぐことになった。



9月にはマントをテーマにした企画展が開かれ、その端切れで作った人形も展示された

川崎さんがギャラリー運営の世界に飛び込んだのは子育て卒業後の61歳。著書「80代の今が最高と言え」(主婦の友社、1650円)では、「思い立った時がベストなタイミング」とつづり、自分と同じく年齢を恐れない挑戦者にエールを送っていた。

ギャラリーワッツのオープンは1999年。訪れる人に作品をじっくり味わってもらおうと、静かなマンションの一室を選んだ。特徴は常設展示をせず、企画展のみを続けていること。ジャンルも絞らず、絵画や彫刻、ファッションアイテムなど多岐にわたる。

情熱伝える

川崎さんはもともとアートの勉強をしていたわけではない。若い頃は幼稚園で働き、結婚して子どもが生まれると、家庭を支えた。ただ、自分の存在意義を探し、表現者に憧れていた川崎さんは、子育てが一段落した時期から刺しゅうやステンドグラスなどさまざまな

東京・港 故川崎さん開設のギャラリー 母の思い 長女受け継ぐ



川崎さんは自宅にもお気に入りのアートを飾り、居心地のいい空間にしていた(主婦の友社提供)

なことに挑戦した。自分で生み出すのではなく、作り手を応援する側として活動したいと気付いたのが40代の頃。「心を動かさし感性を高めるものがアート。若手作家たちの情熱を伝え、見る人たちがそれぞれの心に響くものを発見できる場をつくらう」と、21年前にギャラリーのオーナーになった。

73歳で渡仏
73歳で渡仏し、3カ月間の1人暮らしを経験。「テーマは自立。とにかくチャレンジしてみたかった」。家の鍵が開かないなど数々のハプニングもあったが、自分を磨いて強くなるためのいい経験になったという。

川崎さんは生前の取材で、「前向きに進もうと思っても、落ち込むことがあるのは当たり前。今までは違う行動を少し取り入れながら、一つずつ積み上げていけばいい」と語っていた。

ギャラリー運営を引き継いだ山本さんは「母は遅咲きでもいい、いつも言っていた。何事にも正面から向き合い、作家の魅力を見つけていく母の姿勢を大事にしていきたい」と話している。

口腔機能鍛錬 脳トレにも

鍵盤ハーモニカで 楽しく健康増進

学校の音楽授業などで多くの人が一度は触れた鍵盤ハーモニカ。子ども向けの楽器というイメージが強いが、口腔機能を鍛え、脳トレになるメリットも。手軽に始められるシニアの新しい趣味やデイサービスのレクリエーションとして楽しまれている。

鍵盤ハーモニカ認定講師の日比野綾子さんは、息を吹き込むための腹式呼吸や喉や口周りの筋肉を動かすことが口腔機能の維持につながるという指摘する。舌で音にめりはりを付けるタンギングは嚥下機能低下の予防になる。また、譜面



鍵盤ハーモニカ教室の様子。休憩時には音楽に関する脳トレゲームなどをして楽しむ工夫も＝川崎市

を追いながら鍵盤を指で操作すれば脳トレにもなる。

日比野さんは楽しく健康増進につなげてもらおうと、「大人の鍵盤ハーモニカ教室」を開催。川崎市で開かれた教室では、男女4人が演奏会に向けて練習に励んでいた。男性84は数年前に息子の鍵盤ハーモニカを借りて吹いてから面白さに魅了された。「持ち運びも楽だしいつか外で披露してみたいね」と笑顔を見せた。

神奈川県海老名市のデイサービス施設では、学校の授業スタイルでサービスを提供しており、毎日鍵盤ハーモニカのプログラムを実施。「食べる力を維持するため、定期的な口腔ケアの対面指導と

もに、鍵盤ハーモニカを取り入れている」と運営会社「エターナルスマイル」(同)代表取締役の河野富美子さんは言う。

プログラムでは指の準備運動などの後、輪唱形式で演奏したり、ピアノの伴奏に合わせたりするなど内容を工夫。約2年通っている女性(92)は「頭をしっかりと使っている感じがして楽しい」と話す。

鍵盤ハーモニカは安価な製品もあり、始めやすい点が魅力だ。ただ、日比野さんによると普段使わない頬の筋肉を動かすため最初はだるさなどを感じることもあるという。「まずは教室などで基本的な吹き方を教わった方が安心です」とアドバイスする。

がんばってけさいん

加藤 祥子

9月に82歳になった母は、今年の春に太ももを骨折して入院した。それからつえを突く生活になってしまった。父が13年前に亡くなり、1人暮らしとなった母の癒やしは畑だった。毎年畑にたくさん野菜の苗を植え、それを収穫し、「近所さんや私たちに分けてくれる。それが母の楽しみだった。それが、けがで一変してしまっただけだ。

つえやカートの頼る生活となり、母はとても寂しい思いをしていると感じている。しかし、母はありがたいことに友達に恵まれ、毎日お茶飲みに来てもらっている。皆さんと元

談を言い合い、楽しく笑っている。新型コロナウィルスにも負けないレジデンスたちだ。

ある日、自宅の庭先で柄の長い鎌を使い草取りをしたとのこと。「つえ持ってながら、おつかねがったんでは」と元気な母の顔があった。お笑い芸人さんが言うように「やればできる」と2人で笑い合った。

自分のことよりも50代半ばの娘を心配する母。母さん、まだまだ親孝行、子孝行をお互い元気に行こうね。超・宮城なまりのスーパー母さん。またおどけかだつてほしい。

(宮城県松島町・主婦・55歳)

↑ティータイム

10月は衣替えの時期です。高校2年の次男の冬服を準備してホッとしています。なぜなら、夏服でどじを踏んでしまったからです。次男からは「冬の制服、捨てていいよね」と言われる始末です。

5月のことです。新型コロナウィルス禍による学校休業もようやく終わり、6月に再開するお知らせが来たので制服を準備しようと、クローゼットを開けてあげるとしました。なんと、夏服がない!!

外出自粛中にクローゼットの服を整理しました。そういえば、何年も来ていない夫のスーツを大量に断捨

離した時に、見慣れないスラックスがありました。それが次男の学校の夏服でした。昨年春に新調したばかりで、ワンシーズンしか着ておらず、まだ十分に使えます。

近所にいた同じ高校の先輩からお下がりを頂くことができ、無事学校再開に間に合いました。制服を断捨離してしまっただけなのに動揺して慌てふためいた私ですが、それを横目で見ていた冷静な次男も、内心ドキドキしたのではないかと思います。衣替えの季節になるたびに、また思い出しそうです。

(仙台市青葉区・主婦・46歳)

やり過ぎた断捨離

片桐 典子